

元同志社教授 Lindley Williams Hubbell (リンドレー・ウィリアムズ・ハベル) 氏の薫陶

森永弘司

はじめに

1875年に新島襄によって京都に設立された同志社大学は、「キリスト教主義」、「自治自立の精神の涵養」、「国際感覚豊かな人材の育成」に基づく教育を実施している。また新島は「知育」と並んで、いや「知育」以上に「心育」（「心の教育」）を重視した。その証左となるのが同志社教育の原点とも言うべき「良心」の涵養である。そして新島は「良心」は「人の目」ではな「神の目」を意識するところから生まれると考えた。「一国の良心」の育成こそが同志社設立の最も大きな目標であったことは、同志社正門近くに立っている「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」と記された良心碑の文言からうかがい知ることができる。同志社大学では、設立以来多くの外国人教師（主としてアメリカ人教師）が来日し教鞭をとったが、ハベル教授は「知育」のみならず「心育」においても大きな貢献したという点で、同志社の歴代外国人教師の中で最良の教師の1人であるといえる。死後20年経った現在でも、彼に教えを受けた学生によって偲ぶ会が開催されていることがハベル教授の薫陶の深さを物語っているといえる。今回の発表の目的はハベル教授の事績を通して彼の薫陶を紹介するところにある。

ハベル教授の略伝

1901年

「アメリカ民主主義の父」とも呼ばれるトーマス・フッカーが拓いたコネチカット州ハートフォードで裕福なピューリタンの家庭に生まれる。ピックバン理論にもつながる宇宙膨張の法則を発見し、宇宙望遠鏡にその名を残すエドウィン・ハッブル（1889-1953）は縁者にあたる。（エドウィンは1953年のノーベル物理学賞に内定していたが、不幸にも受賞の通知を受ける直前に亡くなってしまった）

1909年（8歳）～1917年（16歳）

8歳の時からシェークスピアを読み始め、10歳までに全作品を読了しただけではなく、暗記してしまった。またハッブルは93歳で亡くなるまで毎年1回全作品を読み返すのを習慣としていた。そしてこの当時ハートフォードの町で上演されたシェークスピア劇は全て観劇していた。後年大学でシェークスピアを講じた際にも、シェークスピアの台詞を読む時にテキストを全く見なかったとのことである。高校は2年生の時に中退したが、その後は古代から現代にいたる文学、哲学、美術、音楽、歴史などを独習し、幅広い知識を身に付ける。

1925年（24歳）～1938年（37歳）

24歳の時にニューヨーク公立図書館に職を得て、司書のかたわら詩作に励む。26歳の時に処女詩集 *Dark Pavilion* でイェール新人詩人賞をうける。30歳の時に第二詩集 *The Tracing of a Portal*、37歳で第三詩集 *Winter Burning* を出版し、詩人としての確かな地歩を占める。受賞を切っ掛けに書評も執筆するようになり、エズラ・パウンド（1885-1972）やガートルード・スタイン（1874-1946）等との交流もはじまる。特にハベルはアメリカで最も早くスタインを高く評価した人物の1人であり、二人の間の往復書簡は、現在イェール大学レアード・ブック・ライブラリーの「ガートルード・スタイン・コレクション」に全て収められている。

1946年（45歳）～1953年（52歳）

45歳の時にハートフォードに新設されたランドル・スクール・オブ・アーツの教員に招聘され演劇論を講じる。7年後の52歳の時にこの学校が閉鎖されることになり職を失う。

1953年（52歳）～1994年（93歳）

失職中のハッブルに当時京都の大徳寺で仏教を研究していた「アメリカ仏教の母」と呼ばれるルース・ササキ（1892-1967）から日本での大学の教員の仕事を紹介され来日するが、予定されていた大学での採用は中止されてしまっていた。このときササキを助けていたスタッフの一人である東京都立大学名誉教授金関寿夫（1918-1996）と出会う。ハッブルと会った金関は、母校同志社の恩師元同志社大学総長上野直蔵（1900-1984）にハッブルを紹介する。（ササキがハッブルに紹介した大学は大阪市立大学で、当時金関はこの大学で教鞭を取っており、ササキに市大の外国人教師の紹介を依頼したのは金関であったと推察される）上野は初対面ながらハッブルの英文学に対する深く幅広い知識を見抜き、同志社大学の英文科の教授として招聘することを即断する。この事は極めて異例のことであった。というのはハッブルの学歴は高校中退で、数冊の詩集は刊行していたが、大学教員採用にあたって最

も重視される専門分野における著書や論文は皆無であった。当時文学部長であった上野は教授会でのハブルの教授採用を実現するために窮余の奇策を講じる。この年の年末に開催される卒業生対象の講演会に、当時京都大学に留学していたドナルド・キーンと共にハブルを講演者として登壇させることで、彼の業績を作るとともに英文科のスタッフにハブルの学識を知る機会を提供したのである。キーンは後年この講演が「私が日本語でした最初の講演である」と語っている。上野の尽力で翌1954年53歳の時に英文科の教授に就任し、1971年に70歳で定年を迎えるまで同志社で教鞭を取った。同志社定年後は武庫川女子大学等で1985年まで教え続けた。また1960年59歳の時に日本に帰化し、日本名を「林秋石」とした。1994年京都西賀茂の老人病院で逝去する。享年93歳。ハブルは息を引き取る数時間前に「私はもうだめだ。シェークスピアの言葉が出てこなくなった。歴代天皇のお名前も」と語ったと伝えられる。(上記の引用は全て尾崎寔著(2011)『ハブルに会わなかった人たちのために 詩人・L・W・ハブル・林秋石一人と作品』、尾崎寔訳・編著(2013)『ハブルに魅せられた人たちのために—現代英米詩への誘い リンドレー・W・ハブル 林秋石』による)

ハベル教授の薫陶

「知育」における薫陶

1. シェークスピアの全作品を暗記し、自家薬籠中のものとしていた。現在のシェークスピア学者、研究者で全作品を暗記し自由自在に引用できる人がどれ位いるであろうか。
 2. 一流のモダニスト詩人であった。
- 26歳の時にイエール新人詩人賞を受賞する。パウンドやスタイン等とも交流があり、T. S. エリオットの『荒地』を最も早く評価した慧眼の持ち主であった。
3. 古代から現代にいたる文学のみならず哲学、美術、音楽、歴史に対する知識を持っていた。ハブルの学歴は高校中退であり、上記の人文的知識は全て独学によるものである。叩き上げの国際教養人といっているであろう。
 4. 語学学習に対する情熱

日本でのハブルの最も良き理解者の一人であった金関は『英語青年』に掲載した追悼文の中で次のように語っている。「フランス語、ドイツ語、イタリア語、それにプロヴァンス語まで、一番好きだった叔母と、家庭教師からならったという」

現在の日本の英文学科で1から4までの要件を兼備した外国人教師が果たしているであろうか？ 彼の講義に列した学生は、この国際教養人から英米文学だけではなく、その他多くの知的な刺激を受けたに違いない。

「人育」における薫陶

1. リベラリストとしての姿

ハブルは1953年に来日して以来1994年に没するまで故郷アメリカに行くことは一度もなかった。彼が日本へ行く決断を下した大きな理由として当時アメリカ国内で猛威を振っていたマッカーシズムに対する嫌悪が挙げられる。教え子の同志社女子大学名誉教授尾崎寔が1966年から1年間のアメリカでの在外研究を終えて帰国して、最初にハブルにあった時に「文明社会によくこそお帰り！」と言って、両手を広げて迎えてくれたとのことである。このエピソードは不寛容で、狭量な人々が多くなって行きつつあったアメリカに対する、自由主義者ハブルの痛烈な皮肉が込められた言葉であると解釈できる。

2. 清貧な生活

ハブルの来日を後押ししたもう一つの大きな要因としてアメリカの物質文化、拝金主義に対する嫌悪が挙げられる。金関によるとハブルは「食事も、何年間でも、毎晩同じ店で食べて平気だった。もっと美味しい店があると行こうとしなかった。質素を好み、華麗なものは、すべて退けた」金関によればハブルは「キリスト教の教義は信じないが、気質的には、自分はピューリタンだと称していた」と語っていたとのことであるが、ハブルの持つ節制、禁欲、勤勉さはピューリタンのエートスを受け継いだものといえるかもしれない。

3. 人種差別に対する強い反感

ここではハブルの人種差別に対する怒りが表明されている詩を引用してみたい。

“South Carolina” / He always said, / I am a citizen of no mean city, / Meaning Charleston of course,
And Hazel Scott, he said, / Is a clever nigger girl. I got up / And walked out of the apartment.

I never saw him again. / He died soon after. / He was one of my oldest friends.

彼の口癖だった、俺が生まれたのは半端な町じゃない、もちろん、チャールストンのことだが、それにヘイズル・スコットってやつ、と言う、なかなかのもんだ、あの黒ん坊は。私は立ち上がりアパートを出て行った。二度とあいつに会うことはなかったが、間もなく死んだ。古い古い友だちだった。(尾崎訳)

4. 原爆に対する原罪意識

ハブルは原爆に対する原罪意識が窺える作品を残している。

“In Yokohama Harbor”という作品の最初のスタンザは次のように始まる。

What am I doing here, / Where my people unleashed / the age of horror

一体私は何をしているのだ、ここは、わが国の人たちが 恐怖の時代の幕を切って落とした 土地だというのに。
(尾崎訳)

“At Hiroshima”と題された詩は次のスタンザで結ばれている。 But we knew we were standing / Where the end of the world began.

今立っているのは、世界の終わりが 始まった場所なのだと。(尾崎訳)

5. ユーモアと庶民感覚

尾崎によれば、ハブルの作品を評する際に「金関、ティモシー・ハリス、ジェームズ・カーカップ (1918-2009) など」が決まって賞賛するのがハブルのユーモアであったということである。またハブルはヤクザ映画を楽しみ、美空ひばりや橋幸夫の歌謡曲を愛好するという一面も持っていた。

6. 本物と偽物を見分ける鋭い鑑識眼

金関が伝えるところでは、ハブルが最も嫌ったのは「学問的 fake」であったとのことである。

以上 1 から 6 までハブルの人となりの特徴を列挙してきたが、彼の学生の中には彼の人となりに触れて人格的に陶冶された学生も少なからずいたと推察される。

ハベル教授の薫陶を受けた教え子たち

ハブルの薫陶を受けた教え子の中で、後に同志社大学、同志社女子大学及び他大学で英米文学教育に貢献された教員の名前を述べてみる。(紙幅の関係で代表的な教員の名前に止める) 村田辰夫 (梅花女子大学名誉教授)

北垣宗治 (元敬和大学学長、同志社大学名誉教授) 小林萬治 (元神戸大学教授) 岩山太次郎 (元同志社大学長、同志社大学名誉教授) 石田章 (元同志社女子大学長) 尾崎寔 (同志社女子大学名誉教授) 福田京一 (同志社女子大学名誉教授) 二村宏江 (同志社大学名誉教授) 中井震 (同志社大学名誉教授)

ハベル著作集と偲ぶ会

生涯独身であったハブルは死後の財産を京都上賀茂の大田神社に寄付するとの遺言を残した。そして遺産の一部はハブル著作集編集に当てられることになった。ハブル著作集編集の任に当たった尾崎は、心血を注いで 2 冊の著書を完成させる。さらに尾崎はハブルの学恩に報いるべく偲ぶ会を計画し、実現させた。尾崎寔訳・編著 (2013) 『ハブルに魅せられた人たちのために—現代英米詩への誘い リンドレー・W・ハブル 林秋石』に収録されている Modern Poetry 及び On Making the Waste Land の二つの講演は現代詩及び『荒地』の一読に値する優れた解説である。昨年私も出席させて頂いた第二回の偲ぶ会には、96 歳の元同志社大学総長上野直藏夫人 足利家の現当主を含む全国津々浦々からの 53 名の参加者があった。

おわりに

ハブルの遺品の整理にあたった金関は、「彼はぼくらの良心だったな」と呟いたとのことである。金関が書いたハブルの追悼文の最後に引用している、金関が「涙なしには読むことが出来ない」と述べているハブルの絶筆の三行詩を最後に紹介したい。

having spent my life / in the service of beauty: / now human garbage

美しいものへの奉仕に 一生を捧げてきて 今、人間のゴミ (尾崎訳)

参考文献

圓月勝博 (2013) 「ハブルに魅せられた人たちのために—現代英米詩への誘い」『同志社時報』 第 136 号、88.

尾崎寔著 (2011) 『ハブルに会わなかった人たちのために 詩人・L・W・ハブル・林秋石一人と作品』 京都: アイリス・プレス

尾崎寔訳・編著 (2013) 『ハブルに魅せられた人たちのために—現代英米詩への誘い リンドレー・W・ハブル 林秋石』 京都: アイリス・プレス

金関寿夫 (1995) 「最後のモダニスト」『英語青年』 2 月号 Vol. CXL. No. 1

ハベル教授の著作に関して興味、関心を持たれた方は、下記の住所宛てに問い合わせ頂ければ幸いです。

〒603-8047

京都市北区上賀茂本山 185-5 アイリス・プレス 尾崎寔

謝辞

今回の発表に際して有益なアドバイスとコメントを頂いた同志社女子大学名誉教授尾崎寔先生に心から感謝申し上げます。